



発行：救いの光教団
編集：神成編集室
東京都世田谷区北沢
(☎155-0031) 2-22-10
電話 代表 03(3413)0123
http://sukui.jp
毎月1回1日発行
購読料 1部80円
(会員の購読料は会費に含む)

2024
No.620
4月号

— 神を讃える —

人の力は九分九厘神の力は十全と

知る人にして救はるるなり

神を力に 誠の杖もて進む身は

世に怖るものなきを知りけり

目に見ゆる 力は限りあるなれど

見えぬ力ぞ限りなきなり



絶対力

(ぜったいりき)

御光筆

印首印 大光明
落款 自観書
落款印 岡懋之印 東山莊主

◎教団方針

信徒よ速やかに目覚めよ、
それは光を受け、邪を捨て、光を授け、
正に生きる事である

神言霊

時について

無理をしないで時を待つのがよい。「果報は寝て待つ」とはいい言葉です。つまり寝て待てとは忘れること、執着をなくしていることです。信仰している人は神にお任せする考えになるから悠々としてい

る。種を蒔き時を待つのが本当です。神様のことを人に教えても最初は信ぜず、やがて向こうから求めてくることもある。これは蒔いた種が魂の中で育つんです。「あんな人に話をして無駄だ」などということはない。種を蒔いて時を待つことです。すべて人間は最後まで「時」ということに関心がなかった。「時」くらい絶対力のものはない。これに逆らうから失敗したり苦しんだりするのです。まず時に従うこと、あとは我と執着をとることです。この三つを守れば常にうまく行くんです。

天地惟神の大道というが、天地とは大自然であり、惟神とは神の御心のまにまにという意味です。

時期を待て (抜粋)

私は何かを計画する場合決して焦らない。十分多角的に凡ゆる面から客観し、熟慮に熟慮を重ね如何なる点からみても正しく、社会人類の為有益であ

◎方針のみちしるべ

- (一) みつめなおそう明主様の心
- (二) つらぬきとおそう明主様の心
- (三) 教団綱領を尊び実践する
- (四) 信仰継承は家族と家庭円満から

り、永遠の生命ある事を確認し、然る後準備万端を調べ時期を待つのである。処が大抵の人は此の時を待つ辛抱がなかなか出来ない。時期未だ熟していないのに着手するから計画と時期とにずれを生じ思うようにゆかない。あせる。益々ずれが大きくなる、終に失敗する—という順序になるのである。従って肝腎な事は時期来たるまでの期間の辛抱である。物には必ず丁度好い時があるものだ。

処が右のような私の行方に対し非常にまだるがる人が以前はよくあった。又種々の献策や希望をいう人もあったが、私はそれ等を採用すべく約束してもなかなか実行に移さないので焦がれたり不思議がる人もよくあった。私としては、時期が来ないから手を出さないままである。昔から「チャンスをつかめ」とか「風雲に乗る」とか「機会を逸するな」というような言葉もあるが、よく此の理を喝破している。然らばその機運というものは何によって判断するかというと、まず凡ゆる条件が具備し、機運からみてどうしても計画を実行しなければならぬという勢が迫るようになる。そういう時こそ機が十分熟したのであるから、着手するや少しも無理がなく楽々凡てが運んでゆく。そういう訳で更に力が要らない。自然にうまくゆく。要するに熟慮断行の四字に尽き、譬えば重いものを坂から落とす場合、問えているものがある。それを無理に動かそうとすると力が要る。そこを我慢して待っていると障害物が石の重みで段々弱ってゆく。もう一息という時指一本で押すと訳なく転がるようなものである。

天上祭 おことば

皆さま、ごきげんよろしゅうございませう。

明主様が、御肉体を通しての御救いから、神界よりの直接の御救いに入られましたのが、一九五五年二月十日でございます。天上祭には、私達は、御守護に対します感謝のお祈りと、お許しをいただいております。御用を誤りなく果たさせていただきます。

明主様は、天上祭、二年度の慰霊祭と重ねてお仕えさせて頂き大変およろこびのことと拝します。又、祖霊様方のお喜びの様子、ひしひしと感じられまして、大変有難く、そして、心のなごむ思いでいっぱいでございます。

天上祭ということで、明主様の御事をお偲びさせて頂くという意味



「おことば」を述べられる光守様

合いからも、明主様のご昇天につきまして、お話をしたいと存じます。

明主様は、昭和三十年の今日、梅が美しく咲き香るなかで、人を助け、世を救うという、現世での御神業を終えられまして、ご昇天遊ばされました。明主様が、ご昇天遊ばされたということは、全信徒にとりまして、大変悲しいことです。その当時の方々にお聞きいたしますと、それこそ、青天の霹靂、暗夜に灯を失うというように、信徒さん方は、一時、茫然自失の有様であったというところがございます。しかし、これは、あくまで人間という立場からの思いでございます。すべては深い神様のお仕組みであるということ、皆様を受け止めました。そして、明主様が大神様のみ心のままに、人間という肉体の制約をお離れになられました。天界から一層の大きなお働きを遊ばされるところでございます。それぞれのご用に、又、ご精進になりました。

明主様は昭和二十九年四月十四日朝、七回目の関西巡教五日間の旅を予定通り終えられまして、お帰り遊ばされ、いつもと変わらない毎日がつづきました。しかし、十九日の午後、

美術品の整理をなされている時、突然、脳溢血の発作におそわれたのでございます。症状は、軽いものではありませんでしたので、信者さんとのご面会をはじめ、ご執筆、ご揮毫など、御神業はすべて取り止め、ひたすらご静養をなさることにいたしました。幸い、多少の起伏はございましたが、次第に快方に向かっているように見られました。ご静養中の明主様にとって、一番心にかかったのは、全国の信者さんの事でした。毎月のご面会ができなくなりましたので、明主様は、早速信者さんに伝達するお言葉を録音させたのです。そのお言葉の中で、『今回の浄化は、神によって定められたものであり、神業上重要な意義をもつものであるから、信者は心安らかに、信仰に徹するように』とのお示しでございます。

らした方々は、明主様ご自身ご浄化の中にありながら、なお、世を思い、人類の前途を気づかっけていらつしやる、明主様の御心に強く打たれたというところで。

このような最中、明主様の御肉体に、神秘な変化がおきたのです。その一つは、明主様の左の掌に五本の筋が現れ、その一本一本の指に、指先からつけ根まで、五本のタテジワがあざやかにきざまれています。あまりの不思議さに、側近の方が、長年研鑽を積んだ観相家に何を意味するかと尋ねました。その答えの結論は、「神様が現れたことを意味するものである」とのことでした。第二の神秘は、明主様の髪に現れました。明主様は若い時代からすべて銀色に近い白髪でしたのが掌の筋と時を同じくして側頭部のびんの後部に三か所、子供の頭髪のような黒髪が生えはじめました。理容師の方は、二十年以上にわたって人の髪を見てきましたがこのような不思議に出合うのは初めてとの事でした。

ご浄化に入られて五日後のこと、明主様はお床にふし、うつらうつらなされていましたが、にわかには目を開かれ、とめどなく涙を流され嗚咽なさり、お言葉がありました。『今、大峠の様を見せられた。それは、私の想像したよりも、実にひどかったので、非常に悲しい思いがしている。結局、人類が亡びることを一番悲しむのは、誰でもない、神だよ』ということでした。御傍について

「これからは、私に対して、真っすぐに心を向け、私の心を求めて進め」と仰せられました。ご浄化以前におきましても、間違った言行、たとえばウソやごまかし、責任転嫁などに對し、明主様はきびしくその誤りをご注意なさいましたが、ご浄化後はとくにきびしく、どんなささいな間違いに對してもご注意なさい、

叱責をするようになりました。ご浄化の方は、痛みや食欲不振のため、お顔などおやつれになられました。ご神業にかけける情熱は、ますます盛んでした。しかし、ご容態の変化は激しく、食欲がなくなりまして、側近の方に『このまま食べられないとすれば、もはや、自分はこの世を去ることになるのだが』と仰せになりました。

九月十八日のことです。台風が近づいていて、風の強い中、いつものように美術品を鑑賞なさいました。明主様が『台風の前報はまだか』とおっしゃいました。側近の方は「今、お知らせしようと思っていまして」と申し上げました。明主様は『思っていただけでは、何にもならない』とご注意がありました。

十二月十一日、幹部の人を集めて、『ただ一言だけいいますが、いよいよ御神業の本筋に入ってきたわけです。ですから、いろんな変わることがたくさん出て来ますから、まごつかないように』とお言葉がございました。この日、明主様をお迎えさせて頂いた信徒はその場所にとたずんでいました。その時、白い「もや」のようなものが盛り上がり、やがて黄金色に輝きはじめたのです。その光はなおも広がって巨大な光の柱が姿を現し天空に向かってすばらしい白光を吹き上げました。

二月九日の昼すぎからご重体になられ、十日午後三時三十三分、梅

の咲きほこる中、七十二才のご生涯を閉じられたのでございます。

ご昇天後の明主様のお働きはどのように受けとめさせて頂けばよろしいのでしょうか。昭和二十七年十月四日、明主様は、当時読売新聞社科学部次長であった為郷恒淳さんと対談なさいました。

為郷氏「光の玉というのは、明主様だけがもちになつておられるのですか。」

明主様「そうです。」

「どういたしますと、仮に明主様が百年の後に霊界にお入りになりますと、無い事になりますか。」

明主様「しかし、霊界から出しますから同じことです。かえってよく出ます。体があると邪魔になりますから。」

ご昇天しても、生前と同様、むしろ、それ以上に光は信者に取り次がれることをはつきりとお諭し頂いております。今日の天上祭にあたり、明主様の御心を一つ一つ、しっかりと分らせて頂き、明主様のご悲願とも申すべき、人間の真の幸福を実現いたしますために、なによりも偉大なお光、お力でございます。御浄霊、光の運動、光を授ける運動をもつて、ご神業を遂行いたしてまいります。

※観相家＝人相家(人相を見て運命吉凶などを判断する人)

感謝奉告

楽しかった年末の旅行先が能登半島地震で被災、復興への祈り
次男の新事業への応援、希望が持てる未来に感謝

田中かず子

〔東京教会〕



この度の能登半島地震でお亡くなりになりました方、又、沢山の被災された方々に心よりお見舞い申し上げます。

昨年十一月末頃、夫との会話で「今年は旅に行つてないわね。」との話題になり、旅行好きの私達に長男から旅行費のプレゼントを頂きましたがそのままになっていました。夫は青梅市のスポーツ連盟の役員やその他に地域の役、ボランティアと十一月末までは時間がとれません。年に一度位は旅に行きたい私達は十二月初めクラブツーリズムの「絶景能登半島三日間の旅」を広告でみました。ですが出発は十二月も押し迫った二十六日(火)〜二十八日(木)の二泊三日でした。

毎月の御用奉仕は二十五日なので、いつも通りにご奉仕をさせて頂き、翌日、日本航空にて羽田発十三時十五分、小松空港には予定通り十四時二十分に到着しました。一週間前は雪が多く、ツアーもキャンセルがあったと聞きましたが、思っていた程ではなく安心しました。地元の観光バスに乗り、珠洲市で早めの夕食をとり、しらね千枚田の棚田のライトアップを見学後、輪島のホテルに宿泊。露天風呂が気持ち良かった

が、思い切つて旅に行く事が出来た本当に良かったと思えました。年が明けた令和六年二月一日、新年祭の御参拝をさせて頂き、終了後、軽食をいただいて心地よい気持ちで帰宅後、テレビの映像に目を疑いました。驚きで何も手につきません。数日前に観光したすべての町が津波や家屋が倒れて言葉になりませんでした。被災されている方々が一日も早く安心した生活が出来ますように心から願うばかりです。

翌日、朝市通りの見学でしたが、水曜日は定休日の為、輪島漆器工房の方になりました。その後、珠洲市塩田村の昔ながらの塩造りのお話を聞き、貴重な塩である事がわかりました。再びバスで聖域の岬・青の洞窟、空中展望台より見附島(軍艦島)を見学しました。その日は志賀町にありますロイヤルホテルに宿泊しました。ロイヤルホテルが最初に出来たのが能登だとガイドさんより聞きました。

次の日はコースには入っていませんでしたが、千里浜の海岸を運転手さんの特別な御心遣いにより海岸を六百メートル位バスで走って頂きました。千里浜の海岸は粒子が細かく固いので車が走れるそうです。絶景を見ながら、その後は能登鉄道(能登中島駅〜穴水駅まで二十分間のローカル線)に乗りました。二両の小さな電車でのんびりとさせて頂いただけのひと時でした。再びバスで能登ワイン工場へ。能登ワインが出来てから十年弱だと聞いています。

二泊三日の旅も終わり、能登の心温かな人達に接しながら、食べ物も美味しく、毎日変わりゆく天候の変化に我慢して生活していらつしやる姿に元気を貰いました。能登の人達は「弁当忘れても、傘を忘れるな」のガイドさんの言葉は印象的でした。そして二十八日、予定通り能登空港を十七時十分発、羽田空港十八時十五分着の便にて無事に戻ってまいりました。忙しい中ではありましたが

心より感謝申し上げます。

が、思い切つて旅に行く事が出来た本当に良かったと思えました。年が明けた令和六年二月一日、新年祭の御参拝をさせて頂き、終了後、軽食をいただいて心地よい気持ちで帰宅後、テレビの映像に目を疑いました。驚きで何も手につきません。数日前に観光したすべての町が津波や家屋が倒れて言葉になりませんでした。被災されている方々が一日も早く安心した生活が出来ますように心から願うばかりです。

次に次男の話させて頂き、現在四十六歳になった息子は二十七歳の時青梅市で居酒屋をやっていたが、コロナの影響もあり三年前に閉店したのです。その後、以前から興味があった不動産会社へ転職し二年前に宅建の資格がとれました。私が美容院としていたお店は閉店から十五年半が過ぎてもそのままです。というのも、長男が美容師でいつ戻つて来てもいいように空けたままにしていたのですが、昨年末に次男から不動産の事務所として使用したいとの話があり、急に慌ただしくなりました。開業するには申請してから許可が降りるまで二ヵ月間かかるそうです。長年眠っていた店舗に内容が違いますが、新たなお店がオープンするという事で今から隣人達も喜んでくれています。親としても陰ながら応援したいと思っています。

このように希望が持てる未来に恵まれました事、又多大な御守護を賜り、大光明様、明主様に感謝申し上げます。

光守様いつも深いお祈りを賜り、心より感謝申し上げます。

能登半島地震に遭遇！「九死に一生を得る」奇蹟

家合眞由美

〔長岡教会 中央光導所〕



昨年十二月三十一日より私と光会員の主人と二人で能登の輪島温泉に二泊三日の旅に出かけました。年が明けて一月一日午後四時過ぎ、震源地からわずか四キロ離れた半島先端の珠洲市「奥能登絶景街道」をドライブ中、折戸町に入った所で震度五強と震度七の激しい地震に連続で襲われ、目の前二メートル先で土砂崩れが起きましたが、間一髪で難を逃れる事が出来ました。

その後、来た道をバックで戻り広い駐車場に一時避難しましたが、後方も土砂崩れで道が塞がっており、そこで一夜を過ごし、翌朝九時に車に鍵をつけたまま必要なものだけを持ち、徒歩で崩れた岩や土砂を避け大谷の集落を目指しました。途中すれ違う人から情報が入り、五キロ先の『大谷町小中学校』の避難所へ十一時に身を寄せました。昨日から飲まず食わずでお腹も空いていましたが、既に配給が終わっており、夕方四時

のようにやく食事を摂る事が出来ました。避難所は電波の入りが悪く家族や知人に無事でいる事を連絡する為、主人と一緒に少し高い道まで移動して電話を掛けました。その時、車が信号待ちのために私の横に止つたので、邪魔にならないよう後方に下がった所、縁石に躓いて後ろ向きに転倒し、尾てい骨から後頭部を強打しました。その後もタカでも居た学校まで運んでもらいましたが、頭を打っているとの事から、主人を残し自衛隊の救助ヘリで小松基地を経由して救急病院へ搬送されました。病院でCT検査の結果、頭にも骨にも異常がなく状態は軽いとの事でした。診察の間、看護婦さんに携帯の充電や駅前のホテルとタクシーの手配等とても親切にして頂きました。ホテルに着いた頃は打撲した腰の当たりに激痛が走り、立つ、座るが苦痛であったため、椅子に座ったままで朝まで過ごしました。ホテルで買ったビニール傘を杖代わりにして、小松駅から娘のいる上越まで電車を乗り継ぎ、娘の家で食事を頂くべく、午後長岡から息子が迎えに来てくれて、一月三日の五時によくやく自宅に戻ることができました。

痛みが激しかったので、五日に自宅近くの整骨院に行つて診察して頂いた結果、「第四腰骨圧迫骨折」との事で、強い湿布薬を処方されたのですが、あばら骨から背中、尾てい骨が激しく痛み、湿布薬を貼っても治まらなかった時、『御霊紙』の事を思い出して一枚貼らせて頂いた所、うとうとと眠くなり、そつと椅子に座つて少し眠

の時、車が信号待ちのために私の横に止つたので、邪魔にならないよう後方に下がった所、縁石に躓いて後ろ向きに転倒し、尾てい骨から後頭部を強打しました。その後もタカでも居た学校まで運んでもらいましたが、頭を打っているとの事から、主人を残し自衛隊の救助ヘリで小松基地を経由して救急病院へ搬送されました。病院でCT検査の結果、頭にも骨にも異常がなく状態は軽いとの事でした。診察の間、看護婦さんに携帯の充電や駅前のホテルとタクシーの手配等とても親切にして頂きました。ホテルに着いた頃は打撲した腰の当たりに激痛が走り、立つ、座るが苦痛であったため、椅子に座ったままで朝まで過ごしました。ホテルで買ったビニール傘を杖代わりにして、小松駅から娘のいる上越まで電車を乗り継ぎ、娘の家で食事を頂くべく、午後長岡から息子が迎えに来てくれて、一月三日の五時によくやく自宅に戻ることができました。

痛みが激しかったので、五日に自宅近くの整骨院に行つて診察して頂いた結果、「第四腰骨圧迫骨折」との事で、強い湿布薬を処方されたのですが、あばら骨から背中、尾てい骨が激しく痛み、湿布薬を貼っても治まらなかった時、『御霊紙』の事を思い出して一枚貼らせて頂いた所、うとうとと眠くなり、そつと椅子に座つて少し眠

る事が出来、目が覚めてから立ち上がるようになりました。避難所に残してきた主人とは、三日の朝に連絡が取れてからは音信不通となつてしまひ七日の朝、五日ぶりに連絡が取れました。避難所のある珠洲市から、金沢へ向かう車があるとの事で、そこに同乗させて頂き、連絡が取れるようになったとの事です。金沢までの道も所々隆起してありましたが金沢のホテルで休養し翌八日によく長岡へ無事に帰つてまいりました。

それから一ヵ月半が経ち、今では痛みも落ち着いてきました。先日、主人が珠洲市に置いてきた車を確認してきましたが、相変わらず駐車場の前後には土砂崩れでの大きな岩が残つており、復旧の見込みは立たないとの事で、今度は車に鍵を付けて置いてきました。その後、新しく車を購入し早速『交通安全観音様』を頂きました。この度、大きな災害に遭遇しましたが、出発前に教会で御守護願いをさせて頂いたおかげで、大難を小難に変えて頂き、また主人との音信不通や、車確認のため珠洲市に向かう時、また新たに交通安全観音様を頂く事が出来、御霊紙の御守護を頂くなど、その度ごとに御守護御願い・御守護御札をさせて頂き、無事に今日を迎える事が出来ました。

大光明様、明主様このような数々の厚きご守護賜りありがとうございます。光守様いつも温かくお見守りいただきありがとうございます。

天上祭・二月度慰霊祭執り行われる

令和六年二月十日、天上祭、二
月度慰霊祭が東京本部から各布
教拠点に中継を行い厳粛に執り
行われた。

明主様が、昭和三十年二月十日
に御昇天されてから六十九年目の天
上祭を迎えた。

「おことば」では、明主様の御
昇天にまつわる御逸話を交え、明
主様の御心と信徒にむけての心強
い『神言霊』がお取次ぎされ、明
主様信徒としての自覚をあらため
て認識させていただいた。教団で
は、明主様御昇天の立日にあたる

毎月十日を慰霊祭と定めているこ
とから祖霊殿には、祖霊様、水子
様にむけて手作り料理のお膳がお
供えされ、心のこもったおもてな
しとともに懇ろなる御供養の祭典
が執り行われた。
※立日＝命日(亡くなった方の忌日)



光守様御巡光(箱根・富士吉田浅間神社)

令和六年二月二十日、光守様は
戸塚教師を伴い、箱根の明主様奥
津城を御参拝され、明主様に新春
のご挨拶とともに戸塚大介氏の祭
主就任を御奉告されました。その

後、明主様のみあとをしるのび、富
士吉田浅間神社に向かい、本殿内
にて、東京本部輝霊光納斎殿に「木
之花咲耶姫命」御像をお迎えさせ
て頂いた旨を御奉告されました。

明主様の富士登山に関する御逸話

昭和五年(一九三〇年)七月
二十一日、明主様はある神事をき
っかけに富士登山に向かわれまし
た。二十二日、西湖、本栖湖を経て
浅間神社に参拝され、富士吉田口
から登り始め七合目で一泊して、
二十三日、八合目で御来光を拝し
頂上に到着されました。以前、明主
様に龍神が憑って、「自分は富士山
に鎮まっています木之花咲爺姫命
の守護神であって久須志の宮に鎮

まりいる九頭龍権現である。」と
告げたことがあり、この宮をたず
ね、参拝することもこの時の登山
の目的の一つでした。明主様は当
初、龍神から聞いた社は富士の山
麓にあると思い、聞いてみたがわ
からなかったため、ひとまず富士
山頂をめざしたのです。ところが
が山頂の入口近くに相当立派な神
社があり、見ると久須志神社(久
須志は「くすし」。あやしく不思議

なことの意)と書いてありまし
た。それは、浅間神社の奥宮(奥
社ともいう。同一の祭神を祀った
本社・本宮より奥の方に位置する
社のこと)で、別名を久須志神社
ということがわかり、明主様御一
行は神社に参拝を済ませると、登
山の目的を達したので、お鉢めぐ
りの後、須走口から下山され、お
住まいに戻られました。その後、
随行者の一人が不思議にもお住ま
いの洋間のソファアに腰かけた
十八歳ほどの美しい女神を霊眼で
拝したのです。頭髪に飾りを付
け、麗しい十二単衣を着た、えも
いわれぬ気品高い優美な姿でし
た。信者たちはその話を聞いて、
麗しいその女神こそ、ほかならぬ
浅間神社の祭神、木之花咲爺姫命
であり、明主様御一行の登山を喜
んでお礼に訪れたのではないかと
噂をされたとの事です。



富士山頂での記念写真(明主様は上段右から二人目)



富士吉田浅間神社にて



祖霊殿の様子

光守様のご浄霊日

お知らせ
光守様浄霊日は当面の間、見合わせていただきます。

能登半島地震災害義援金募集の案内

この度の能登半島地震で被災された皆様ならびにご家族の皆様にご心よりお見舞い申し上げます。
教団では、被災地の方々を支援するための義援金を募集いたします。
各々の布教拠点に設置されています「義援金箱」に皆様の真心をお寄せ下さい。
受付は令和6年7月15日(月祝)迄と致します。